

日本における高校柔道部員とコーチ間の人間関係の 検討 : CART-Qを用いて

著者	山口 香, 岡田 弘隆, 増地 克之, 市村 操一
雑誌名	筑波大学体育系紀要
巻	38
ページ	59-67
発行年	2015-03
その他のタイトル	Using CART-Q to Investigate the Relationship between High School Judo Club Members and Coaches in Japan
URL	http://hdl.handle.net/2241/00126175

日本における高校柔道部員とコーチ間の人間関係の検討 — CART-Q を用いて —

山口 香*・岡田弘隆*・増地克之*・市村操一**

Using CART-Q to Investigate the Relationship between High School Judo Club Members and Coaches in Japan

YAMAGUCHI Kaori*, OKADA Hiroataka*, MASUCHI Katsuyuki* and ICHIMURA Soichi**

Abstract

This study assessed the psychological state of relationships between coaches and youth athletes in judo. The coach-athlete relationship questionnaire (CART-Q) developed by Jowett and Ntoumanis was applied to measure the athletes' subjective assessment of their relationships with their coaches. The mean scores of between 4.54 and 5.18 for three traits of interpersonal relationships for the 141 athletes participating in this study were not high compared with those of seven other countries where identical studies have been conducted, indicating that Japanese youth judo athletes have weaker relationships with their coaches. An assumed cause of the weaker relationships is the person assigned to coaching. In Japanese schools judo coaching is conducted by teachers who are not always specialists in judo while club coaches in other countries are mostly licensed and are able to better to focus on relationships with their athletes.

Key words: 柔道、高校柔道部、コーチ—競技者間の人間関係、CART-Q

1. 研究の目的

学校運動部のコーチと競技者間の人間関係は、競技者とコーチ、生徒と教員の関係でもある。また日本古来の武道である柔道は他競技に比べてコーチが全人格的な指導、人間教育を目指すという側面もある。近年、柔道における体罰の事案が多く報告されており、柔道におけるコーチと競技者の関係はどのようなものであるのかについて基礎的なデータを得たいと考えた。

20世紀のスポーツ心理学では、競技者個人の心理に焦点があてられてきた。BiddleやGuisinger & Blattは、動機づけや不安の克服などの問題が対人関係の問題よりも研究されてきたと述べている^{2,4)}。コーチと競技者間の人間関係についての研究も行われてきたが、それらは主としてリーダーシップの研究

であった。しかし、1990年代の後半になって、コーチと競技者間の人間関係の研究領域が広がり、リーダーシップ以外の人間関係を理解する理論とその客観的な測定法の開発の必要性が提唱されるようになった^{3,11)}。

Jowett³⁾は、コーチ—競技者関係には2つの考え方がありと提言している。一つは競技成績の向上につながる「成功—非成功」の次元の関係であり、もう一つは競技者の人間的成長をも促す幅広い側面での関係であり、その関係は「効果的—非効果的」の次元の関係であると述べている。

効果的な関係には、「共感」「理解」「正直」「支持」「好意」「受容」「敏感さ」「気遣い」「敬意」「積極的関心」などがあげられている(Jowett & Cockerill)⁴⁾。それに対して、非効果的な関係には、「無関心」「無

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

** 筑波大学 (名誉教授)
University of Tsukuba (Prof. Emeritus)

感情」「よそよそしさ」「反感」「欺瞞」「搾取」「身体的・性的虐待」などがあげられている (Balague¹⁾, Brackenridge³⁾, Jowett⁵⁾)。また、北京オリンピックで好成績をおさめたカナダの競技者とコーチのペアの面接調査を行った Werthner¹²⁾ は、成功したコーチは技術指導の専門性だけではなく、競技者との間でよいコミュニケーションを行い、信頼され、競技者の話を傾聴するよい聴き手であったと述べている。

このように、現代におけるコーチ-競技者の人間関係の研究は、単にリーダーシップ理論を基礎に置いた研究にとどまらず、広い人間関係論を基礎において行われるようになってきている。Jowett & Cockerill⁷⁾ はコーチと競技者の関係を感情・思考・行動の3つの側面から研究できるような研究モデルを提案した。そのモデルはコーチ-競技者の人間関係を3側面から研究する方法であり、3 C's モデルと名付けられた。3つの側面は「関わり」(Commitment)、「親密さ」(Closeness)、「相補性」(Complementarity) と定義された。「関わり」は、コーチと競技者の競技

上のパートナーシップを長期にわたって持続させようとする意図と願望を反映している。これはコーチと競技者間の結びつきの認知的(知的)側面を表わしている。「親密さ」は、コーチと競技者の結びつきの情緒的側面や、感情的愛着を示している。この状態では、両者の間に、好悪、信頼、敬意、評価などでプラスの方向での感情的関係が存在している。「相補性」は、コーチと競技者の間の協力的で有効な相互関係と定義される。それは、友好的で、気安い、自発的で、共感のある行動特性を含む協力関係となって現れる。

上記の3つの特性を測定してコーチ-競技者の人間関係を客観的に把握する質問紙が開発された (Jowett & Ntoumanis⁹⁾)。この質問紙は、競技者、コーチ双方から知覚され報告されたコーチ-競技者の人間関係を測定する目的に使用できるように作られている。たとえば、競技者に対する「あなたはあなたのコーチに対して親密さを感じますか」という質問に対応して、コーチに対しては「あなたはあなたの競技者に対して親密さを感じますか」という質問項

表1 CART-Qの各項目と3特性の平均値と標準偏差 (N = 141)

Items & Traits	M	SD	(M	SD)
01 私は私を指導しているコーチと親密だと感じる	4.46	1.46	5.26	1.31
02 私は私のコーチと深くかかわっていると感じる	4.52	1.48	5.80	1.14
03 私は私のコーチと競技をすることで明るい将来が開けると感じている	4.65	1.54	5.25	1.36
04 私は私のコーチが好きだ	4.84	1.88	6.16	1.02
05 私は私のコーチを信頼している	5.20	1.84	6.02	1.13
06 私は私のコーチの努力を尊重する	5.29	1.93	6.25	1.01
07 私は私のコーチが私の進歩のために払った努力を立派だと思う	5.38	1.83	5.64	1.33
08 私はコーチに指導されるとき落ち着いている	5.02	1.68	5.97	1.23
09 私はコーチに指導されるとき私はコーチのくれることによくこたえている	5.39	1.66	5.95	1.00
10 私はコーチに指導されるとき私は全力を出すつもりでいる	5.62	1.75	6.08	1.14
11 私はコーチに指導されるとき私は友好的である	4.44	1.83	6.08	1.08
「関わり」(01,02,03 の平均値)	4.54	1.49	5.43	1.27
「親密さ」(04,05,06,07 の平均値)	5.18	1.87	6.02	1.12
「相補性」(08,09,10,11 の平均値)	5.12	1.36	6.02	1.11

()内は英国のデータ (Jowett & Ntoumanis⁹⁾)

目が準備されている。

このようなコーチ-競技者間の人間関係の分析的な研究は、本邦の望ましい高校運動部活動を促進するための基礎的研究になることが期待される。

本研究は以下の目的をもって行う。①日本の研究協力者と諸外国におけるコーチ-競技者の人間関係の比較を行う。②競技者が感じている、コーチ-競技者の人間関係と満足度、および競技者の成績向上の意識との関係を調べる。

2. 方法

2.1 調査対象と実施の手続き

本調査は、筑波大学体育系研究倫理委員会の審査を受けて許可された（承認番号：体 26-32）。

調査の実施は以下のように行われた。機縁法により選んだ全国 12 の高校柔道部のコーチに調査協力を依頼した。質問紙には研究者は競技者個人の情報の守秘義務を護ることを明記した。質問項目にはコーチについての評価を求めるものもあるため、回答はコーチのいない場所で行い、回答送付用の封筒に密封の上、研究者に直接送付するか、密封された

回答をコーチのもとに集め、研究者に送るよう依頼した。

質問紙は 12 の高校柔道部に配布され、165 名から回答を得た。集められた回答用紙は、集計に先立って、研究者によって真面目に回答されたものであるかどうか調べられた。全項目に同じ評点をあてた回答や、項目間で矛盾した回答を示した回答用紙は無効回答として集計から除外された。165 の回答中、無効回答は 24 名（14.5%）、有効回答は 141 名（85.5%）であった。有効回答を寄せた 141 名の性別は男子 101 名、女子 37 名、無記入 3 名であった。回答者の柔道の技能レベルは黒帯（1-3 段）125 名（88.6%）、茶帯（1-3 級）5 名（3.5%）、白帯（4 級以下）11 名（7.8%）であった。出場試合の経験では、地区大会予選以上のレベルの競技会経験者は 66 名（46.8%）であった。

2.2 質問紙

Jowett & Ntoumanis⁹⁾ の CART-Q は、コーチ-競技者関係に関する感情・思考・行動を回答者に「自分にどの程度当てはまるか」を 7 段階で評定しても

表 2 11 項目と 3 特性の評定点の相関係数行列

項目	関わり	親密さ	相補性
1	0.93	0.68	0.61
2	0.93	0.68	0.59
3	0.90	0.75	0.61
4	0.79	0.86	0.57
5	0.73	0.96	0.66
6	0.64	0.92	0.65
7	0.62	0.89	0.71
8	0.57	0.65	0.71
9	0.56	0.66	0.79
10	0.55	0.72	0.87
11	0.38	0.23	0.86

らうように作られている。たとえば「私はコーチを尊敬する」という項目に対して、「きわめて当てはまる」場合には(7)の、「まったく当てはまらない」場合には(1)の評点をあたえる。CART-Qに含まれる評定項目は11項目であり、その中には「関わり」に関する3項目、「親密さ」に関する4項目、「相補性」に関する4項目が含まれている。

すでに述べたように、CART-Qが開発されたときには、競技者の観点とコーチの観点の双方から調査できるように設計されていた。本研究では競技者の観点からの項目のみを使用した。その理由のひとつは、コーチの標本数を十分な数だけ得ることには時間がかかるために、今後の課題としたことである。もう一つの理由は外国でのCART-Qを使ったいくつかの研究が競技者を対象として行われており、その結果と日本の参加者の比較を行うことを目的としたからである。

CART-Qの邦訳は、米国人でバイリンガルの人物に検討してもらったうえで、柔道の教員3名が、質問項目が理解しやすくなるように文言の微調整を行った。その結果、本研究で使用された質問紙には、CART-Q日本語版(11項目)(表1)に加えて、競技者から評価された「コーチとの人間関係の全体的満足度」を測る2項目とZhang & Chelladuraiによる競技者が感じている「コーチの指導による成績向上の意識」を測る3項目が含まれた¹⁴⁾(表2)。

3. 結果

3.1 人間関係の各項目と3特性の平均値(M)と標準偏差(SD)

CART-Qの11項目と3特性、「関わり」(項目01-03)、「親密さ」(項目04-07)、「相補性」(項目08-11)の平均値と標準偏差を表1に示した。

コーチ—競技者関係の11項目それぞれの項目の評定は、最低値1(まったく当てはまらない)から最大値7(きわめて当てはまる)まで広く分布していた。中央値4は(どちらでもない)に対応しているが、11項目の平均値はそれより少し高い値を示しており、最大値は項目10の平均値5.62であり、最小値は項目11の4.44であった。11項目を3特性(関わり、親密さ、相補性)に分類して平均値を求めた数値が表1の最後の3行に示されている。これを見ると、「親密さ」の評点が高く、「関わり」の評点が低くなっている。

表2には11項目と3特性の評定点の相関係数行列が示されている。特性の評定点は、Jowett & Ntoumanis⁹⁾の研究によって示された3特性を測定していると考えられる項目の評定点の平均値であ

る。項目1は「関わり」の特性得点との相関係数は0.93であり、「親密さ」の特性得点との相関係数0.68より大きなものとなっている。

項目1-3は「関わり」と高い相関関係を示し、項目4-7は「親密さ」と高い相関関係を示し、項目8-11は「相補性」と高い相関関係を示している。このことは合成得点と合成された下位項目の相関関係であるから当然のことである。重要な点は各グループの項目が当該の特性との相関関係では高い値を示していることである。あたかも因子分析の結果の3因子の負荷量行列のようになっている。しかし、最尤法による因子分析の結果の3因子構造の適合度のカイ二乗検定の結果は、危険率 $p = 0.023$ であり、因子の妥当性は十分なものではなかった。しかし、2因子構造や4因子構造よりは適合度が高かった。3特性の尺度としての信頼性をクロンバックの α 係数で求めると、「関わり」は0.912、「親密さ」は0.928、「相補性」は0.781であった。3特性の尺度の内的整合性からみた信頼性は確かめられた。したがって、本研究で使用した「コーチ—競技者関係質問紙」(CART-Q)は、コーチと競技者間の人間関係を3つの特性の側面から測定できると考えられる。

3.2 他国のデータとの平均値の比較

本研究の回答者のコーチ—競技者関係の評定点の平均値の意味を理解するための方法の一つは、他のスポーツ集団での調査結果と比較してみることである。このCART-Qをつかった調査結果は、まだ日本では報告されていないが、この質問紙の考案者であるJowettとその協力者たちは、英国を含めていくつかの国の調査結果を報告している(Jowett & Ntoumanis⁹⁾, Yang & Jowett¹³⁾)。

表1の右の2列には英国の調査結果を比較のために示した。この調査の回答者は214名の英国のコーチ(35%)と競技者(65%)である。コーチは競技者への質問とは対称的な質問項目に対して評定を行っている。これについては研究方法の項で説明してある。競技者の評定だけの日本のデータと比較することは慎重でなければならないが、「関わり」「親密さ」「相補性」のいずれの特性においても、それらの下位項目でも本研究の回答者の評点は英国よりも低い傾向を示している。(平均値の差の検定結果は「関わり」で $t = -5.56$ 、「親密さ」で $t = -5.52$ 、「相補性」で $t = 6.34$ で英国の平均値のほうが有意に大きかった)

競技者の側からだけのコーチ—競技者関係の評定の結果がYang & Jowett¹³⁾によって示されている。この研究では参加者のスポーツ種目は一種目ではな

表3 コーチ-競技者関係の3特性の平均値の8か国比較

国名	関わり	親密さ	相補性
日本	4.54	5.18	5.12
英国	4.54	5.46	5.35
中国	5.64	6.24	6.01
ベルギー	5.29	5.03	5.13
ギリシャ	5.99	6.46	6.03
スペイン	5.27	5.67	5.77
スウェーデン	5.35	5.94	6.12
アメリカ	5.14	5.86	5.88

参加者：日本 N=141, 英国 N=339, 中国 N=200, ベルギー N=200, ギリシャ N=115, スペイン N=120, スウェーデン N=169, アメリカ N=177

(Yang & Jowett, 2012)を基に作成。

く他種目にわたっているが、比較のために本研究の参加者の結果を加えて、8か国の回答者の3特性の平均値を作成した(表3)。

7か国の資料に本研究(日本)の結果を追加して比較すると、日本の高校柔道競技者が経験しているコーチとの人間関係は3つの特性ともに低いことが分かる。「関わり」も薄く、「親密さ」も淡泊で、「相補性」ところも浅い、という傾向がデータの上からは読み取れる。それぞれの特性の8か国のなかでの日本の順位を見ると、「関わり」は7位、「親密さ」は7位、「相補性」は8位となっている。

3.3 「満足度」や「成績向上」など外的基準とのコーチ-競技者関係の関係

表4に「コーチとの関係の満足度」「成績向上の意識」に関する項目の平均値と標準偏差を示した。これら2つの変数を「満足度」と「成績向上」と省略して示す。これら2つの変数を外的基準としたとき、「満足度」や「成績向上」に「コーチ-競技者関係」の変数がどのように関係しているかを調べた(表5)。

表5の相関係数からつぎのようなことが読み取れる。まず、競技者のコーチとの関係の「満足度」と競技者が感じている「成績向上」との間の相関関係

は、中程度のものであり、「満足度」が高ければ「成績向上」も高いという関係はそれほど高いものではないといえる。統計的検定をすれば有意な相関であるが($n = 141$ では、 $r = 0.21$ 以上は1%水準で有意)、それは帰無仮説「母相関係数は0」を否定しているだけであって、一方の変数の他方の変数の説明力は32%である。そのために、「満足度」と「成績向上」の3特性との関係は一様ではない。「関わり」も「親密さ」も、外部基準である「成績向上」よりも「満足度」とのほうと関係が強い。「相補性」は両方と同じくらいの関係を持っている。「成績向上」を中心に見ると、「親密さ」との関係よりも、「関わり」と「相補性」との関係が強い。

3.4 コーチ-競技者関係の男女比較

コーチ-競技者関係の感じ方や考え方が男女の競技者の間で統計的に差があるかどうかを3特性と2つの外的基準の平均値の差についてt検定を行った(表6)。平均値の差の統計的検定をすると、差のある項目はなく、男女間に差があるとは言えなかった。正確な比較のためにはもっと多くのデータが必要だが、「関わり」「親密さ」では男子のほうの平均値が高くなっており、女子では「相補性」の平均値が男子より高くなっている。「満足度」「成績向上の

表4 「コーチとの関係の満足度」「成績向上の意識」に関する項目の平均値と標準偏差

Items	N	M	SD
12 私はコーチとの関係全般に満足している	140	4.87	1.54
13 私はコーチが競技者との関係全般に満足して いると思っている	140	4.75	1.53
「満足」(12,13の平均値)	140	4.80	1.46
14 コーチの指導によって今シーズンの私の チームの成績は向上した	141	4.72	1.73
15 コーチの指導でシーズンの目標をこれまで に十分に達成できた	141	4.27	1.63
16 コーチの指導で前のシーズンと比べての私 の成績は向上した	141	4.57	1.81
「成績向上の意識」(14,15,16の平均値)	141	4.53	1.56

(項目 12, 13 について無回答のものが 141 名中 1 名いた)

表5 コーチ-競技者関係の3特性と「満足度」「成績向上」の相関係数

	「関わり」	「親密さ」	「相補性」	「満足度」	「成績向上」
「関わり」	1.00				
「親密さ」	0.77	1.00			
「相補性」	0.66	0.71	1.00		
「満足度」	0.72	0.68	0.62	1.00	
「成績向上」	0.64	0.59	0.63	0.57	1.00

認識」については男女間でまったく差は見られなかった。しかし、3特性については女子の平均値はいずれも7か国の平均値と比較するとともに低かった。

コーチ-競技者関係の3特性と外的基準の相関関係の男女比較を表7に示した。外的基準と3特性の間の相関に若干の違いがみられた。女子では「関わり」や「親密さ」が「成績向上」の認識よりも、コー

チとの関係の満足度と強い相関関係を持っていた。男子の「関わり」や「親密さ」は、女子よりも強く「成績向上」の認識と相関関係を持っていた。

4. 考察

本研究の結果は、極めて簡潔にいうならば、高校柔道競技者の感じているコーチとの関係は「関わり」「親密さ」「相補性」においては必ずしも満足す

表6 コーチ—競技者関係の3特性と外的基準の平均値の男女比較

3特性と外部基準	男子(M, SD)(N=101)		女子(M, SD)(N=37)	
「関わり」	4.61	(1.32)	4.37	(1.57)
「親密さ」	5.21	(1.64)	5.04	(1.89)
「相補性」	5.05	(1.37)	5.28	(1.35)
「満足度」	4.80	(1.40)	4.78	(1.67)
「成績向上」	4.53	(1.52)	4.56	(1.67)

表7 コーチ—競技者関係の3特性と外的基準の相関関係の男女比較

男子	関わり	親密さ	相補性	満足度	成績向上
関わり	1.00				
親密さ	0.78	1.00			
相補性	0.68	0.75	1.00		
満足度	0.69	0.65	0.64	1.00	
成績向上	0.72	0.64	0.67	0.56	1.00
女子	関わり	親密さ	相補性	満足度	成績向上
関わり	1.00				
親密さ	0.76	1.00			
相補性	0.66	0.66	1.00		
満足度	0.76	0.78	0.61	1.00	
成績向上	0.48	0.55	0.62	0.59	1.00

数値は積率相関係数。 標本数 男子(101), 女子(37)。

べきものではないことを示唆した。7段階の評定尺度上で測定されたコーチとの関係の平均値からも、そのような状態が推察されるだけでなく、同じ質問紙を使った7か国のデータと比較しても、本研究の参加者のコーチとの人間関係は薄い結果になっている。

この状態は、コーチの人間性によるものか、コーチが競技者との人間関係を深めるような指導法を学んでこなかったためなのか、その結論を出すためにはさらに研究を進めなければならない。人間関係を深められない原因には、コーチの置かれている外部の状況や環境の問題もあるだろう。コーチの人間性は優れていても、極めて多忙で競技者と接触する機

会が少なければ、競技者との人間関係は温かくも親密にもなりづらい。

日本のコーチの置かれている状況は北米や西欧のコーチの置かれている状況と同じではない。日本の中高の運動部のコーチは教員の職務の一部としてスポーツ指導に当たっている。一方、北米や西欧のコーチはスポーツクラブの専門職として指導をしている場合が多い。短絡的にいうならば、日本のコーチは競技者との人間関係が不十分でも、職を失うことはなく、競技者が別のクラブに移籍することも実質上はない。一方、クラブ所属のコーチはいわばプロのコーチである。そのため、競技者はコーチにとっての顧客でもあるので、サービス精神を持ち、

人間関係を保つことはプロの業務の一部でもある。この、教員の兼任業務としてのコーチングと専門職としてのコーチングの違いが、人間関係の違いに現れてくる可能性もある。

日本の学校運動部は、「スポーツ機会の多様化への対応と教育としての公平・平等を同時に実現することが求められている」¹⁰⁾と述べられているように、運動部が競技者(生徒)の需要に十分応えられる制度とはなっていない。一方で運動部のコーチは自分の指導に合わない競技者に対して別のコーチのいるクラブを勧めることも困難であると思われる。このような状況では、コーチの側にも自分に合わない競技者には深く関わらないで卒業させ、自分の指導法に合う競技者が入学してくるのを待とうという姿勢が現れても不思議ではない。また、競技者もコーチの指導法が合わなかったとしても逃げ場がないために深く関わりたいと考える者もあると推察される。

また、コーチ-競技者間の人間関係が他の国に比較して薄い傾向がみられる原因の一つは、教員であるコーチが、競技者と同じスポーツを愛するものとして、地位や役割を離れて自分の心を開いて競技者である生徒に接することの困難さにあると考えられる。教員は、運動部の指導を教育活動の一環としての役割であることが念頭にあり、個人の生活面までコントロールしようとする傾向があるのに対して、プロのコーチは自分の役割を越えたところまでは干渉する必要がない。このような立場の違いが人間関係に影響を与えている可能性がある。

本研究で得られたデータを英国のデータと比較する際に、Jowett & Ntoumanis⁹⁾によるコーチと競技者を含むデータと、Yang & Jowett¹³⁾による競技者のみのデータを参照した。日本のデータは3特性のいずれもが、英国の2組のデータよりも低かったことはすでに述べたが、英国の2組のデータを比較するとコーチを含むデータのほうが、3特性のいずれにも、高い評点を示している。このことは、コーチのほうが競技者よりもコーチ-競技者間の人間関係でポジティブな見方をしていると考えられる。Jowett & Ntoumanis⁹⁾はコーチと競技者のデータを別個に示してはいないので、コーチの知覚している人間関係をさらに調べ、競技者の知覚する人間関係と比較する課題が残されるだろう。

本研究のデータ解析の結果をみて、その原因をさまざまに討論したが、どれが原因なのかについては、推察に基づいており、それらを確認するための新たな研究計画を立てて、実証しなければならない。

5. 結論

高校柔道部員の感じている、コーチと競技者の人間関係が、「コーチ-競技者関係質問紙」によって調査された。その結果、高校柔道部員の感じているコーチとの「関わり」「親密さ」「相補性」のいずれにおいても高い評定点はあてられなかった。また、同じ質問紙を使用した7か国との比較においては、極めて低い順位となった。この人間関係の薄さがコーチの人間性に起因するのか、コーチの置かれた状況の違いによるものなのかが検討された。このような人間関係の特徴が柔道競技者だけに限られたものなのかどうかについては、さらなる研究が必要である。

文献

- 1) Balague G (1999): Understanding identity, value and meaning when working with elite athletes. *The Sport Psychologist* 13: 89-98.
- 2) Biddle SJH (1997): Current trends in sport and exercise psychology research. *The Psychologist* 10: 63-69.
- 3) Brackenridge C (2001): *Spoilsports: Understanding and preventing sexual exploitation in sport*. Routledge, NY.
- 4) Guisinger S & Blatt SJ (1994): Individuality and relatedness: evolution of a fundamental dialectic. *Am Psychol* 49: 1104-1111.
- 5) Jowett S (2003): When the honeymoon is over: A case study of a coach-athlete relationship in crisis. *The Sport Psychologist* 17: 444-460.
- 6) Jowett S (2005): The coach-athlete partnership. *The Psychologist* 18, 7: 12-15. (www.thepsychologist.org.uk)
- 7) Jowett S and Cockerill I (2002): Incompatibility in the coach-athlete relationship. (Ed.) Cockerill, I (In) *Solutions in Sport Psychology*. Thompson, London.
- 8) Jowett S and Cockerill I (2003): Olympic medalists' perspective of the athlete-coach relationship. *Psychol Sports Exerc* 4: 313-331.
- 9) Jowett S and Ntoumanis N (2004): The coach-athlete relationship questionnaire (CART-Q): development and initial validation. *Scand J Med Sci Sports* 14, 245-257.
- 10) 作野誠一 (2011): 学校部活動のジレンマ. 「現代スポーツ評論第24号」, 創文企画, 東京, 71.
- 11) Vanden Auweele YV and Rzewnicki R (2000): Putting relationship issues in sport in perspective.

- Int J Sport Psychol 31: 573-577.
- 12) Werthner P (2009): Bulding an effective coach-athlete relationship: Perspectives from Great female coaches and athletes. Canadian J for Women in Coaching (Online).
- 13) Yang SX & Jowett S (2012): Psychometric properties of the coach-athlete relationship questionnaire (CART-Q) in seven countries. Psychology of Sport and Exercise 13, 36-43.
- 14) Zhang Z & Chelladurai P (2013): Antecedents and consequences of athlete's trust in the coach. Journal of Sport and Health Science 2, 115-121.